

なごしこ



三月号

國運を賭した日露の戦も早三十年の昔となった

其の後も國勢は旭日昇天の有様だ。滿蒙の地下に眠れる

十万人の忠烈の士も如何ばかり喜んでおられる事だろう。

今又非常時局に直面し國民の結束、努力を要するの時

だ。此の時に當り世の荒波に乗り出す卒業生

一同の奮勵努力を希望して止まぬ。

何れもも身体を大切に、丈夫に益々智徳を磨かれん事を

祈る次第だ。

明治天皇御製

今はとて學の道におこたるな

ゆるし力文をえたるめらはべ。

シン

エンソク
 ボクハエンソクニ
 メルトノリマ
 サウシテダン
 ラカウチヨウ
 トホッシマ
 ナガタセソ
 イワレタカラ
 スコシアル
 ダカラボク
 タマゴヲタ
 サカイウラ
 マシタサウ
 イガゴハン
 タノデタベ
 ノブユキサ
 エンソクニ
 タマゴト
 メルト
 アキラニ
 ラレタ

トイツテミン
 カウザウチ
 イモノラウ
 カラ見ニエ
 イマダトイ
 シテ井ルト
 トンネルヲ
 ニジ
 キノフノエ
 ト、テルコ
 オバチヤ
 ガ井マシ
 タ私ハ

石田セ

タレモアソブ人がキナイデ「テッコ
 オバチヤンアソバウ」トイッタラ、ソコ
 ニチヨウド、エッコトマツチヤンがキマ
 シタ。私ハ、テッコオバチヤント、フタリ
 デハサビシイノデ、テッコオバチヤンガ
 マキヲハコンデキルウチニ、オッコト
 ニッコト私ガアソンデキルト、トモジ
 ラデヤンガ「オセソ、マキヲハコベ」トイ
 ヲタノデ、私ハ「イヤダヨ」トイッタラ
 ニシガデテ来ました。ソウシタラ、オチ
 イヤンガ「エッコ、アレヲトツテキテオ
 ビニセヨ」トイッタノデ、エッコモ「イヤ
 ヲアソノオビヤンカイラナイヨ」ト
 イッタラ、トモジヲチハ「ハハハ」
 ト、ワライダシマシタ。私ハモウニジ
 ガ、キエタノダト、オモイナガラ、空ヲ見
 マシタ。スルト、モウキエテイマシタ。
 私ハ、ニジガドウシテキエルカ、ワカリ

マセソ、タカラウチへカへンテ、オカ
 チヤンニ、ニジハドウシテキエルノダイ
 トキタト、オカアチヤンハ「センセイガ
 年カ、三年ニ、ナツタラオシエルヨ」トイ
 タノデ、私ハウレシクテタマラナクナリ
 マシタ。ダカラ私ハ「ドウキヘルダラ
 トイッテカンガへテシマシタ。ダケ
 ワカラナイノデ、ソウシテオキマシタ
 スルト、ダンダンウスグラクナリマシタ
 ソノ、アクルヒモアサ早くオキテゴハン
 ヲタベテカラマタ、ソトへ出テ、空ヲ
 見マシタ。空ハ、ヨイトンキデシタ。

二年生

◎犬

私のうちに犬がゑます。名はボチと
 いひます。みんながほちのことをお
 はい、犬だ、きれいな犬だといひてゑ
 ます。私にはもうなれてボチといひて
 呼ぶと、小さな足でちよ／＼と歩いて
 来ます。けれどもほかの人が呼ぶと
 にげてしまひます。ボチは小さな
 犬です。死して中々おりこぐです。こは
 んをこぼすと、小さなしたを出してひ
 りひます。私にはボチを何へんもだい
 てやります。ボチは私にだかれな
 かほをなめます。私はそのなめるのが
 のはい、のです。ボチはほんとに私
 と仲よしです。

やほりえみ子

◎遠足

鈴木幹哉

先生があと四日で遠足だとおつしや
 した時に、ぼくはあ、三月二日だと思
 ったのしんでゑました。
 朝バチ／＼する音で目がさめました。
 とびおきて見ると、そのおとはお母さ
 んが、こはんをたく風音でした。だ
 い一番に空をながめました。星が出
 てゑましたから、大きな聲で「ようし
 へい」といひました。お母さんに笑
 はれてしまひました。
 かほを洗つてしたくにか、りました
 おかあさんが「おれが、おむすびた
 ま、こキメラメルみかん、おん入っ
 てゑますよ」といひ、かはんをいよわし
 てくたました。元氣よく學校に行き
 ました。まもなくか相がなつてはじ
 まりました。校長先生が「みなさん

をほり

けがせしないやうに。とお話がありました。した、高等二年から出かけ始めました。ぼくたちも元氣よく歌ひながら朝日山にのぼりました。さかいうらでおべんたうを食べたとき、きれいなうみでおよぎたくなりました。たのしくあそんでかへりました。かへるとき、遠足もこれで終った。と思ひました。

花になって、ちってゆく。ほるとに私は花がすき。

笹本正子

ばらの花

宮崎ます子

きれいな、きれいな
 ばらの花はな、
 お庭にさいた
 きれいな、ばらの花、
 私のすきな、ばらの花、
 つばみが、だん
 花になる

がぢまる、がぢまる
 せいとかノッ木
 おうちのやねまで
 といきさう、
 がぢまるさんの
 それおひげ
 ずい分たくさんね
 いく本がおしへて
 ちやうだいよ
 これば
 だれにおおしへられたいの
 がぢまるさんは
 ほんとにいぢわるな

終り



々々めすす

尋
 三
 さり

「えんそく」

奥山巖美

した。ポストのある所で、水やトマトを出して、くれました。此の家の人は、しんせつです。まもなく、小みなとにつきました。ここはきれいで、ひろくつてよい所です。わがれて、少し遊んでから、おべんたうをたべて、三、四年は、さく、ごうを掘つて、せんそくごつこを、したり、角力を取つてあそびました。女生は、めく、おにや、ひざのきやう、そう、な、として、あそびました。その中、五、六年生が、山から、下りてきて、おべんたうを、たべます。と、雨が、ふつて、きました。間もなく、高等科の生徒が、下りてきました。雨、が、止んだので、三、四年生は、七ま、がり、を、と、ほつて、おほま、うらに、きました。ここで、みんなど、一つ、し、ふ、になつて、大村へ、か、へり、ました。け、へ、あつ、まつて、校長先生から、みな、さ、かん、が、よく、先生の、言、ふ、こと、を、き、いた、から、雨が、降ら、な、かつ、た、とおつ、し、つ、た、時、は、マ、ア、々々、ふ、かつ、た、と、おも、つ、た。オ、ハ、リ、

（お家へかへつたら、デント、が、つ、た、で、せつ、する、と、コンド、は、大、雨、が、降、り、だ、し、ま、した、ね）

ラッパがなった、さういがかう軍人青年だん、ぼうごだんの人たちがあつまつた、てつ
 ぼうじうけんをつけてけんまふくあつまつた、學校の庭でせいをろいして、
 でかけた、私達はハトバへ集まつて見ました、みんな日の丸の旗をもつてあつ
 まりました、その中にハトバの海の中でたまがはれつすると、海の水が朝
 山より高く上りました、てきがおほき浦のちからせめてきました、こちら
 は大ぼうやくくわんじう、小じうをさかんどうちました、まもなくてきが上つ
 てきて、ハトバで大せんそうしました、それかすんでから、陸軍記念日の歌を
 たじなが、學校へあつまつて式がありました、そして、一つしよに万ざい々々
 となへてわかれました、先生が陸軍記念日は今から三十年前日本軍がマシヤ
 の軍を打ちやぶつて、奉天城をせんりゆうした日です、がらわすれてはいけ
 ないと、おつしやいました、私たちは、けつして、亮礼てはなりません、
 をはり

てんらんくわいの歌

木村岡正江

一、はやく来い、てんらんくわいよ、早くこい々々かぐかうへ
 わたしは人のかいてだす、がさ方づぐわのせいせきを
 見るのがホントにたのしんだ、早くこい々々てんらんくわい

二、雨がふつて風ふいても、いいからはやくくまでおくれ

書方見たりづぐわみたり、手ささいほうみ人を見て
 お汁こたべてミルウの人で、そして左のじくあそびませう

かつやうしやしん

宮川靜悠

かつやうしやしんを見に行きました、雨がふつてきたので、けんぶつの人
 ら、わんご、虎彦さんがやつてしまふといつたら、皆か一度に手をたたいた、
 エムデンの船のせん争をしたが、ずいぶんものすごいものでした、次
 定次をやりました、かたしい所へくると、みんななみだをこぼしました、
 かつやうしやしんが、あはる頃雨がふりだして、まました、大せいの人があぬれて
 かりました、おいぶんおそくなり、まました、僕達は家へかへつて、着物をとりか
 へておきました、翌朝お母さんにもうかつやうへ行つてはいけないと、言はれ
 ました、をはり、(かつやうしやしんを見ても悪いわけではないが、お母さんおそくまで見て
 くれなうしたり、學校を居ねふりなうと、べんきやうのさまたげをすからいけなう)

三月のおもひ出

さんねん生

何と日なしに陽気ですわ、そして二日の遠足はウンとごちやうを山、海の砂原

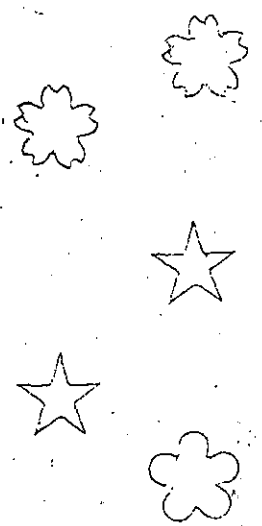
卒業生の皆様より本校の爲に...

学校へ通ふやうになつてからよく面倒を見て下さり...

◎今右

藤池登代

あ、思はれも三々二十五日、卒業生と別れる...



尋六の綴方

六學年を卒業す、奥山良二

一日一日と曆をめぐつて居る内はや尋常六年...

私の一家

益田 修

私の家は一人ふへ二人ふへ段々と多くなつて...

◎今右

宮崎やす子

今まで私達を親切に導いて下さつた卒業生...

月と星

板東角男

「今晚はよい月だなあ」と思ひつゝ、庭に出た...

マヤった。だから又 あしたのぼんに 見にこ
まうといふ。だまして家に歸った。私が勉強
してから、あんなにも月はうつくしい人たらう
と考へて、あのような、うつくしい月が今ど
うして出てこないのだらうとつくづく考へた。
あ、なんと美しい月たらうと、月ほ

ある夜の出来事 浅沼 鐵夫
今夜にかぎって八時半頃に床についた。又真中に
今夜から床をとることにきめた。なんだが身が
まじくして目がつぶらないうすぐ横にぬておた
らうと云はれた。ゆめを見るのは一番きらいで
かつきもめったにゆめなどは見ださばない。
近所は今夜にかぎって早くからいそぎと静ま
りかへつて近所の、ちくおんさともならない。ぬる
前に、ゆめのことを考へると、ゆめを見るので
気がまいてない。そんなことを思つて居ると三千分
たつと九時と打つた。時に、ふくが「ニヤオ」とい
ては、ひどく、びくびくした。何も出なければよいが

卒業生諸兄弟を送る。高一年一同
諸兄弟此の學びやに共に學び共に遊び戯れ
しも早七筆を過ぎぬ月日の經つのは矢よりも
早しとか古人の云ふ如く只七年と短きよう
なれど日數に積れば千八百七十日余となり短から
ぬ日數である。其間親しく吾等を弟妹としてよく
子守して戴きし御恩如何ばかり。今諸兄弟を此
の思ひ出深き學びやより送り出さんとするにあつた
り感謝の詞を述べんとするも只々胸をまよるのみ。
ここに只一言を呈し餞とせん。
兄弟等よ、七年に學び得た智徳は社會に必
く精神方面に特た技術方面にまっすぐに應用
され社會の悪風を負けずとは言ひまでもなく
悪風あらはよろしく之を改善するの心掛けを
寸時もお忘れなく、自分の為のため、村のため
ひいては國家のため有用の人物となられん
ことを切に希望して、餞の詞にがへん
さらば、兄弟等の健康と發展を祈る

高等科卒業生の言葉

橋山 悟

八年間教育を受けた母校を後にする日も近づ
いた。我等は今世の中へ出て立派な人となれ
ば先生方への御恩返しだ、此の覚悟を持って
荒港にのり出さう。先生方、同級生、下級生さらば。

浅沼 寛

月日のたつのは水の流れる如しとか、吾等が
入學してから早八年、早くも早いよ、母校
を去らなければならぬのか、或る時は先生
に不平を云つた、又怒つて見た事もあった。
今卒業に臨みつく、諸先生の恩を思ふ。

王 置 夏 雄

思へば八年前に此の學校へ父母兄弟に手を引
かれて来た。又先生に世話をやかせ怒られて早
八年、此の二十五日は卒業生として立つた。
母校をばなれ社會に出るのだ、此れも皆親や
先生方を思ふのである。

奥山 貞美

いよく卒業になつて見ると母校が思ひのえか
ら社會に出るのだ苦しい事もある。面白く事も
あるだらう。其の苦しみも通り抜けたら明るく世間
だ、運悪ければ、苦痛だらう。お別れだ、先生方、
同級生よ、さやうなら。

佐々木 悠 翔

思ひ起す八年前母に連れられて學校へ来た、初
めはうれしかつた、或る時は先生に怒られた、
今この事を思つて先生方にすまなうと思ふ。

浅沼 義 男

卒業するのが後十日だ、後十日と思ふと此の日
日がなんだか、もうたいた、怖れがする、思ふ
てみんなと學び、勉強し、又面白く遊ぶの、この
十日間、前には早く卒業したい、そして何となく
出来ると思つてゐたが今になつて、もうと、學校に
居た、様な気がする。

上 部 國 男

来月三月二十五日は我等にとつて一生の思い出

昨日、卒業したる人の世に命をなげうつ
て働くかである。先づ一番に見つけろのは
職業だ。これと身体を運者にしなければなら
ない。身体が違ふのは、國の富だ。破らば、

雨宮 敏雄

入學して此處に八年。もはや卒業も間近に迫
つた。今母校を去るに勝んで誰一人母校を思
ひからぬ者はない。或る時は悲しい事だ。事
もあつた。色々の思ひ出で後に、よく卒業
せし出たり一生懸命に力をつくさう。

大塚 次雄

昨日の日は、朝、もりの日だ。此の間一年
まどと思つたらもう八年間了きた。この八年
間、泣いたり笑つたり怒りたりした。もう二
度と来ない八年間だつた。先生方同級生と
こやうなう。さげんよう。

赤井 三郎

幾々卒業だ。此の母校で八年間勉強した事を思
ひ出すと少しづつはこんな事もあつたと思ひ
つゝ、社会の人となるのだ。先生方又は母校へ

の恩がなせなけりばならぬ。
木村 幸男

入學して以来八年。間もなく母校を去らねば
ならない運さうだ。ことを思へば先生に思ひだ
すもあつた。社会に出て行く我等の前途には思
ひがたなびいてはならないか。気がおこる。

浅沼 啓介

八年間、八年間、勉強して、よくよく人知れな
つた。或時は怒りぬくやうな時があつた。又海へ
おめつた。之から社会へ一人として働くかぞ
せりもくぞとどうやらめれぬ掛けやうから、

四代 豊藏

長い八年間、懐しい母校で勉強して、運動も
いよく、母校を去らなければならぬ。い
と勉強したのがもうあつた。此から、
となつて目的を全うしやう。そして、
かざりう。どこまでも國の爲よ一心に、
さらば母校よ、お別れ。

東の夢は何處へ、八年間を過さしき事
今日、唯悲しき心を記さば、此の途に昇るやま
け、師の教を受け、或時は師の怒りに、此の途に
言もあつた。優しき親の、か、師、や、学校、三年、卒業、す
こと、がいさる。懐しき師の、怒、り、は、母、校、よ
さげんよう。

田崎 謙子

唯夢の如しに過し、八年間、懐しく、懐しく、思ひ
の、文、と、過、した、八、年、間、を、過、した、今、此、の、學、び、を、終
に、して、未、だ、見、ぬ、太、洋、に、来、り、お、ま、う、の、か、ぞ、あ、あ、う
ゆ、る、困、難、と、戦、ひ、を、成、功、を、目、指、して、遠、く、時、期、は、未
だ、の、だ、で、さ、げ、ん、や、母、校、を、懐、し、の、友、と、幸、多、か、れ

田崎 謙子

あ、此、の、日、の、シ、ン、タ、マ、の、よ、く、懐、し、い、母、校、を、去
ら、な、け、り、ば、な、ら、な、い、の、だ、思、ひ、し、日、で、歸、り、見、れ
ぬ、な、世、自、分、は、一、生、懸、念、に、勉、強、を、な、か、つ、た、で、あ
ら、う、け、れ、ど、も、今、は、あ、つ、た、あ、つ、た、此、れ、か、ら、人、生、の
荒、波、を、渡、つ、て、行、く、の、だ、さ、げ、ん、や、先、生、方、同、級、生、方、

青藤 留

いとく、荒波とた、か、い、時、節、か、きた、の、不、ま、合、見
め、太、洋、の、海、の、中、を、成、功、を、目、指、して、行、く、の、だ
懐、き、思、ひ、子

懐、き、思、ひ、子

師、は、尊、し、我、が、師、の、恩、何、處、に、も、忘、れ、聞、え、る、も
う、八、年、間、を、過、して、社、会、に、お、ま、う、の、で、あ、る
母、校、に、も、指、指、を、お、ま、う、の、居、る、い、ち
ぞ、此、に、し、て、も、母、校、に、来、る、こ、と、も、ぞ、ん、ち、に、お、ま、う、
ま、ん、ち、ら、い、さ、う、お、ま、う、さん、方

大川 富田

八年間、懐しい母校を、やうに、學問を、過して、来た、又
或日は、笑つたり、お、ま、う、の、た、り、し、て、懐、き、に、勉、強、し、
来、た、身、年、母、校、を、卒業、す、私、達、皆、は、社、会、に、お、ま、う、
の、だ、社、会、に、お、ま、う、の、母、校、を、懐、し、の、友、と、幸、多、か、れ
つ、て、幸、多、か、れ、母、校、を、懐、し、の、友、と、幸、多、か、れ

小澤 トキ

思ひ起して、夢を、お、ま、う、の、頭、を、過、り、懐、き、
かつた、事、思、ひ、かつた、年、幼、時、の、こ、お、ま、う、の、思、出、を、
八年の間、先生の、慈愛と、友の、友情、と、に、お、ま、う、の、嬉、し
く、過、し、て、来、た、今、や、社、会、の、一、人、と、な、り、つ、て、時、代、は、日
の、前、に、進、つ、て、来、た、今、の、世、代、の、若、者、は、い、ち、い、ち、役、立、樂、し

學校生活より社会生活への第一歩を踏み出す
何と希望多き人生の春である。伸び行く青春
の翼を大空に揚げて我は行くなり希望の彼岸へ

高木 鏡 彦

あゝ長い間中思を授けた諸先生方にも三月二
十五日でお別れだと思ふと胸が一杯になる
在校生は喜び勇むが卒業組はしんぼりして
ある事だろう。そんな事を考へてあるうちに
卒業式が早いものだ。

奥山 純子

愈々卒業だ、まだ造りたての小舟で太平洋の
やもつと——廣い大海原に向ふのである、
波風もあらう、此の太平洋こそは俗に云ふ社
会である。色々の困難に逢ふのは覚悟してあな
ければならぬ。卒業後も勉強はやめられない
正しく立派な人間となり諸先生方の御恩の万
分の一たりとも報還へしむればならぬ。
や、卒業が、さらば母校と見えなう。

菊池 美津

懐しの母校よ、恵みの諸先生!!
善き事をし皆の前ではめられた事もあった、又
悪き事をし叱られた事も度々あった。け
んやしかつた、嬉しかつた、でももう過去の事、
あゝ、夢多かりし八年間、今より行くか人として力
を、恵みの諸先生、世に出る同胞よ、永遠に幸
多かれと祈る。

學生 葉

八年文をいもどきし、学舎を後に行く道の
世は非腐時の荒波ぞ、慈愛に充ちた先生り
教を授けて右口行く、若しかりし日暮と下さ
せしかりし日永久に、我等の胸に雁るなり、
さらば恵みの先生よ、さらば世に出る同胞よ
卒業がれと祈るなり。

正しき道を踏み、決して邪道に入らぬ称、

人に後指さぬ如棉、奥々も頼む
卒業生 諸氏、 Y 生

修 卒業式前

専攻二年 菊池と純子

長いけれども短かつたこの一年間、私
達はいろいろと過して来た。せう、願
みれば卒業式の時白すむ二本の袴袴に
友と嬉しみに胸きおどらむはから校門
まぐらった私達、月日の立つのはは
んとうに速いもの、最早修業式も目前
に迫つていよ、四月からは最上級生
と名づかる。この一年間は夢の如
うに過ぎてしまひ、たが今度は一生
懸命勉強して見事に卒業、十年間おせ
て下された父母先生方の御恩にお對ひ
すの覚悟です。

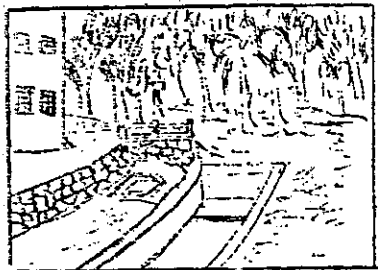
専攻二年 奥山 久

昭和九年の春からこの十年の三月の今
日まで一年間、静かに振り返つて見ると
何といたさうも私にとりては印象深
い年であつた。せう、
忘れられない関西の大嵐、あの時
姉は羽衣に居りましたのでどんなに驚
き心配したか知れません。続いて東北
地方の大飢饉、校長先生の度々の談
又新聞紙上に傳へられたいたさう、ま
あけられた出来事には思はず涙、又同
さまむけりやうむことかどんむにあつ
たか知れません、
直母に深い御恩を蒙つた、二月
十一日に始めて鉄砲を持つて修業式

展覽會圖書得獎票

(五票以上)

<p>尋二 一〇 平野 昌代 八 佐々木 末男 八 浅沼 良吉 七 加賀谷 肇 五 渋谷 淳</p>	<p>尋三 一〇 横山 秀雄 一〇 浅沼 俊 九 井上 政 九 諸田 光子 二〇 菊池 和美 九 後藤 茂哉 九 富士井 悦子 五 吉田 亮二</p>	<p>尋五 二二 菊池 かつ 九 内山 登美子 六 高崎 輝子</p>	<p>尋六 一三 菊池 昭郎 一〇 板東 角男 九 黒川 三義 五 和田 富子 二〇 吉原 光臣 二〇 高崎 喜久雄 七 大川 富 上野 國男 平木 忠雄</p>
--	---	---	---



尋五男 藤巻 清

學校日誌より

- 一月 露戦役の志士神頼介氏の銅像建設資金の一部として職員児童一同より金七帛七拾銭也寄贈致しました。
- 三月二日 四組に令北で遠足を行いました。
- 三月十日 第三十回陸軍記念日に當り防護団の演習に参加す。
- 三月十七日 例年の如く展覽會を催し盛念とした之も保護者会の後援の賜と感謝致して居ます。

御寄贈

- 一金五円也 小松寿太郎君より保護者會基金へ
- 一金五円也 益田豊富氏より備品費へ

右の通り多額の御寄贈を戴きました。誠に厚く御礼申し上げます。

思ひ出多き

母校よさらば

なつかしき節よ

親しき友よ

いざさらば

つづかなかれ



昭和拾年三月

五月